インドの農村の貧困女性たちの経済的自立について

――成功と失敗を分ける分岐点は何か[1]――

山下明子

論文要旨

今日、貧困と格差は開発途上国だけではなく日本でも問題となっている。とくに地球規模の貧困の女性化はジェンダーにかかわる問題であり、増大する性暴力とも結びついている。本論は、カースト制度の問題や宗教間対立を抱えながらも高度経済成長がつづくインドにおいて、経済的に自立しようとしている社会底辺の貧困女性たちについての調査に基づいている。具体的には、インド政府の貧困女性対象の少額融資制度と結びついたＳＨＧ（自助グループ）を、南インドのタミル・ナードゥ州の農村のダリット女性を中心に、成功と失敗の内容と原因、ＮＧＯとの関係、また、政府のＳＨＧ政策の変更による問題点について吟味する。ダリット女性が自尊心を回復し、性的な差別と暴力から自由になることと経済的自立の活動がどのように関係するかを分析する。

序

経済のグローバル化とそれに伴うような軍事化が世界に広がるなかで、開発途上国だけではなく、先進国でも経済格差による貧困と社会的排除の問題が深刻になってきている。また、「貧困の女性化」[2]が顕著になるなかで、開発における女性の権利とエンパワーメントの重要性が認識されるようになった。アジアでも多くの女性ＮＧＯが、女性差別撤廃条約や第四回国連女性会議（一九九五年）の政府行動綱領の実現をめざして、自国の政府や司法、慣習の壁と草の根レベルで立ち向かいながら活動している。このような働きが成功して地域全体が大きく変化したところも

あれば、失敗したＮＧＯも多い。

本論は、筆者が一九八〇年代前半から関わりを持っているインドの農村の貧困女性、とくにカースト制度の最下層のダリット[3]やアディヴァーシの女性たちに焦点をあてた調査研究に基づくものである。[4]

インドは人口が十二億人をこえる巨大な国である。民族や人種、風土の違いはもとより制度的な理由からも、地域によってかなりの差異がある。それは言語において特に著しく、方言を入れれば約二千語が知られている。独立後の州制度によって、インドには現在、二八州と五つの連邦直轄地があり、準公用語とされる英語を除いて、二二の公用語が憲法（二〇〇八年の第八附則）で指定されている。

中央政府がヒンディ語を使用する一方、州単位で公用語を定めている。そこで、州をこえてコミュニケーションができるには、北インドではヒンディー語が、南インドでは英語力のある者が優位になる。その優位性を得るために教育レベル[5]とカーストを中心とした親族環境が重要視される。ダリットやアディヴァーシの場合、州の公用語の中でもさらに独特の大小の言語集団であるために、ほとんどが公用語からも疎外されている。大半が農村や森林地帯に居住するという理由だけではない。近くの州境を越えて隣の州都に移ってスラム住まいする家族も多いが、そこでは新たな言語の壁がある。子どもたちは無料の公立学校であっても、生まれた州の言語とも家庭での母語とも異なる言語の学校に通わなければならない。そこに教師による差別が加われば、ドロップアウトが多くなる。

このような環境に育ち、ジェンダーバイアスも重なるために、十五才以上のダリットとアディヴァーシの貧困女性は現在もほとんどが非識字者である。[6]インドではカースト、ジェンダー、さらに言語が、貧困女性の自立問題と政治的にも深くつながっている。一般に貧困層とは、国連あるいは当該政府が定める貧困ライン以下（ＢＰＬ）の層のことであるが、インドの場合、極端な貧困層、貧困層、ＢＰＬのボーダーラインの層、そして政治的カテゴリーである「その他の後進諸階層」（ＯＢＣ）に分けられる。八〇％以上が農山村に住むダリットとアディヴァーシの女性は大半が極端な貧困層になる。このような女性たちが経済的に自立するには個人の力だけでは限界がある。

筆者は、南インドのタミル・ナードゥ州およびカルナータカ州の農村および都市近郊で、地元の女性ＮＧＯの協力を得て調査を行った。これらのＮＧＯは政府の貧困女性対象の政策を利用して、村々にマイクロクレジットに基づく自助グループ（ＳＨＧ）を作り、それをトレーニングすることで最下層の女性たちの経済的、社会的、政治的な自立を図ろうとしてきた。調査の方法としては、ＳＨＧに対しては質問用紙を使った記入と個人面談の両方の方式をとった。記入については、識字能力のあるグループ・リーダーが筆者も交えて各会員から聞き書きして署名をもらっ

たものと、筆者が通訳を介して直に質問・記入したものがある。面談については、立ち会ったワーカー自身が地元の貧困女性であり、また質問者が馴染みの外国人であるせいか、インフォーマントの話を止めるのが困難なほどの個人情報が語られ、村の実情や性的な暴力の問題もクローズアップされた。また、西インドのグジャラート州で同様の調査を行った。ガンジー主義の女性自営労組SEWA（Self- Employed Women's Association）によるSHGつくりや協同組合活動を南インドの場合と比較することで、貧困女性たちがインドのカーストや宗教間対立を越える力をいかに獲得できるかについて考察してきた。但し、紙数の関係で、本論では統計を省き、調査地についても一地区に絞って報告する。

今日、世界的に軍事主義が強まり、ジェンダーの再編もあらわになっている。インドにおいても新帝国主義的なグローバル化に女性も巻き込まれている。このような中で政治的な腐敗や利権がらみの汚職と不合理が貧困層を直撃している。一方、新たな共同体性によって差別と貧困のない社会を指向する階層をこえた運動も広がりをもってきている。この視座を入れて分析したい。

1　インドの貧困問題とカースト、宗教、ジェンダー

筆者が最初にインドに研究滞在したのは一九八四年四月から翌年の九月である。この当時と比べると近年のインドの変化はすさまじい勢いである。しかし、何を変化の基準とするかによって、これを「進歩」とは単純には言えないだろう。「インドは現代世界の縮図のような国である」と批判するのは国際的に著名なインド人作家で人権活動家のアルンダティ・ロイである。以下は筆者のインドでの経験、とくに最下層の女性たちの間での経験からの感覚にもっとも近い記述である。

インド国民としてわたしたちは、両極端のものを常食として生きている。カースト虐殺と核実験、モスク破壊とファッションショー、教会焼き討ちと拡大する携帯電話ネットワーク、債務奴隷制とデジタル革命、女児の間引きとナスダックの暴落、いまだに後をたたない持参金目当ての妻殺しとミスワールド輩出。（中略）昨今の公共事業に見られるのは、極端なまでの不合理だ。わが家の裏手を走る道路では、毎晩、痩せこけた道路工事人たちが溝を掘っている。光ファイバー・ケーブルを敷設し、デジタル革命を促進するために。凍てつく冬の寒さのなかで、彼らは数本のロウソクの明かりを頼りに作業を進める。(7)

では、地球規模でみれば両極端である現実が、なぜインドでは日常的なことなのか。これは単にまだ近代化していないから、ということではないだろう。インドでは日常的にカースト制が存続している。たとえば、大都市の近郊の中産階級のマンション群には、掃除や食器洗い、あるいは洗濯のための使用人が、その大方の居住地のスラムから通って来ることは稀である。若い夫婦はカースト別の使用人を家電製品で代替する。しかし、インドの経済成長を消費生活で謳歌する人たちも、通勤途上や仕事場で、街やマーケットで、家族や知人の家で、貧しい人たちがさまざまな「その日暮らしの仕事」で働く姿を、当然のように受け入れている。農村でも都市でもインフォーマル・セクターの雑業で働く低カーストが多いのがインドである。二〇〇一年の国勢調査によれば、周辺労働者の六一％が女性である。[8] 彼女たちは路上の動物や鳥などと同様で自然な姿に見えるかもしれないが、日常的な差別と暴力に晒されている。

インドの貧困の問題は、国連で定義するような一日一ドル以下で生活する人口の多さだけあるのではない。その貧困層の大半を占めるダリットやアディヴァーシについての詳しい実態調査や研究、記録が現在でもほとんどないことである。ロイが憤るように、国連の国別調査ではインドで五六〇〇万人とされる難民となった膨大な層の行方についての記録がない。[9] インドに四〇〇〇以上ある大規模ダムの開発によって移住させられたのも大半がダリットとアディヴァーシである。二〇〇一年の国連の人種差別に関するダーバン会議に向けた「ジェンダーと人種主義に関するダリット女性全国連盟宣言」も、ダリットや宗教的マイノリティ、アディヴァーシの女性についての政府のデータと情報が極めて不足していること、またそれが意図的である点を指摘している。[10]

この背景に世俗国家インドの公的な立場がある。ヴァルナ・カースト制[11]はバラモン（ブラーマン）を最高位とするピラミッド型の浄・不浄の階層制で、全インドで四〇〇〇以上ともされるカースト（ジャーティ）に別れると言われる。その最下層がダリットとアディヴァーシである。一九五〇年一月に施行されたインド憲法により不可触制は廃止されたから、不可触民は法律上では存在しない。不可触行為は刑法上の犯罪である。[12] しかし、カーストはヒンドゥー文化と思想であり、制度的に廃止されたわけではない。憲法にもカーストは明記されている。そこで、ダリットとアディヴァーシはカースト制の最下層に位置しており、可触民（カースト民）と不可触民の区別は実際には厳然と続いている。

独立後の国勢調査では個別カーストについての調査事項がないために、カースト単位の人口分布はわからない。但し、留保枠という優遇措置[13]の対象としてヒンドゥー教徒の「指定カースト」（SC、元「不可触民」）とアディヴァーシの「指定部族」（ST）は仕分けされている。日常のさまざまな行政手続きにおいて、この明記が必要である。二〇〇一年の統計では、全インドでSCは一六・五％、STは八・二％である。当然ながら、

州によってこの比率は大きく異なる。またSCとSTの区別があいまいな場合もある。しかもこの優遇措置の範囲がSCとST以外にも「その他の後進諸階層」（OBC）に広げられている。OBCをカースト単位で選定している州が多い。実利を求めてOBCの枠に入ることを求める高カーストも多く、カーストの政治化の要因となっている。

後述するタミル・ナードゥ州の場合、FC（Forward Community）、BC（Backward Community）、MBC（Most Backward Community）、そしてSC&STとなる。またBCに入らないがFCでもないカーストを狭義にOBCとして、優遇措置の対象にしている。FCにはバラモン（ブラーミン）と一部のクシャトリア階層が入るが、イスラーム教徒、キリスト教徒、ジャイナ教徒もFCに位置づけられている。教義にカースト制がないという理由からである。しかし、現実にはムスリムもクリスチャンも大方がダリットである。[14] 農村ではヒンドゥーのSCと同様に、村外れのダリット居住区に暮らす。留保枠の対象から外されているために、経済的にはより困難である。そこで信仰上はクリスチャンであっても、SCとして登録している人口がかなりの数になるものと推定されている。筆者の面談でも多数にのぼる。

このように経済上の貧困女性一般の統計では対象範囲があまりに広く、カースト差別を伴うダリットやアディヴァーシの問題を特定して見ることができない。一九九〇年以降の市場開放でグローバル化が浸透してくると、経済的な困窮を理由として保護枠を要求するカースト単位の結束と政治運動が盛んになっていることからもわかるように、優遇措置は過度に政治化してきている。保護枠に入らず、地位と特権を享受している高カーストは比率的にはインド人口のごく一部でありながら、社会的にますます支配的になる。[15] その結果、最下層カーストやマイノリティ集団のなかでも、比較的余裕があり、コネと賄賂を使える家族や成員がより有効に制度を利用する一方で、極貧の家族は義務教育も終えることができず、たとえ大学の入学枠や公務員の採用枠があっても、そのような恩恵から排除され、より低賃金の労働を強いられることになる。[16] ダリットやアディヴァーシの極貧女性は、権利においてエンパワーされないかぎり二重、三重のくびきを負ったままである。

インドの政治と社会が高カーストあるいは特定のカースト集団による支配下にあるとすれば、ジェンダーもまたカースト制を抜きに分析できない。インドのカーストは単なる職業別集団ではなく、バラモン階層をトップに、異なる人種や民族、種族、言語、宗教などを統合している家父長的な階層秩序であり、宗教的な浄穢の観念によって維持されている。市場経済化によって都市の中間階層の若者のカースト意識は薄れており、ダリットにも経済的な成功者はいるが、高カースト支配およびカースト民とダリットの差は厳然と維持されている。それを支えるのが性のカースト制であり、ヒンドゥーの婚姻法にそれがもっともよく現れている。[17]

バラモンは、宗教的な浄穢の思想において最も「浄性」が高いとされる。それが祭司階層であるバラモンの特権かつ義務であるが、具体的には菜食主義と禁酒、そして女性の性の管理・支配である。家父長制と女の性の管理は同義であるが、仏教やジャイナ教と違って、ヒンドゥー教は僧侶の出家制をとらず、バラモンも結婚しなければならない。そこでバラモンの血脈を維持するために自分たちの女の性を管理し、さらにはカースト制を維持するためのジェンダー役割を女性に内面化させる必要がある。経済的にも女性には土地・財産権を認めず、幼児期は父親に、嫁しては夫に、夫の死後は息子に従うべきものとしてきた。三倍年上の同カーストの男性に娘を嫁がせることを父親の義務としたのが幼児婚であり、結婚後は夫を神として仕えるべしとしたのが、年齢を問わず寡婦の再婚を禁止し、息子がいなかった場合に妻を夫と共に焼くサティとなったのである。[18]

サティは現実には特定の地域や特定のカースト共同体にかぎられているにもかかわらず、「真にインド的な女性らしさ」の理想像とされてきた。高カーストのヒンドゥの女性にとって、結婚とは義務であり、唯一の浄化儀礼であり、夫に仕えることが天国へ転生するための門とされている。寡婦はもっとも不吉で忌まわしい存在とされるから、サティまでは行わなくても、現在でも寡婦の服装や行動は厳しく制限されている。下層カーストも経済的に少し豊かになると社会的地位の上昇のために高カーストの文化や慣習を真似る(サンスクリット化)。近年は寡婦への規制が広がっている。

菜食や禁酒とは異なり、高カーストの浄性を維持するためにはバラモン女性だけを不浄視することはできない。女をすべて不浄な存在として、それを低カーストの不浄性と比すことも論理的に必要となる。カースト間の掟を細かく定めた『マヌ法典』には、「動物、太鼓、低カースト、女は打つべきなり」とある。女性が自分よりも下位カーストの男性、とくにダリットと婚姻することは逆毛婚とよばれてタブーである。社会的に排除、蔑視され、子どもも差別される。後述するように、当事者の女性は「名誉の殺人」の対象にもなる。ダリットと高カーストのカースト間恋愛や妊娠によるさまざまな問題が起きている。

一方で、下層カーストの結婚は浄化儀礼などではなく、単に性的快楽のためのものとされる。上層カーストが下位の女、とくにダリットの女をレイプや買春しても、穢れたことにはならない。しかもダリットの女性は自分たちの共同体の男性からも自由ではない。インドの日常的なレイプ事件の被害者の大半がダリットとアディヴァーシであり、しかも報道すらされないのは、このようなカースト制の現実と関係しているといえる。

先に述べたようにインドは言語州であるが、「女のカースト」にあたる言葉がどの言語にもある。これは「女のくせに」とか、「女に生まれたカルマ（業）」をさす。高カーストの女性が最下層のダリット男性とも自由に結婚でき、あるいは子どもを産めるようになれば、カースト制の根幹が崩れる。しかし現実には、高いダウリー（持参金品）を出すことによって娘を少しでも上の階層に嫁がせたい、それによって社会的身分の上昇をはかろうとするサンスクリット化がある。婚家での娘の安全を願う親の気持ちもあり、経済発展とグローバル化がダウリーを止めようもなく高額化させているのである。[19] ダウリーにからむ殺人も増加している。しかも、次にみるように高カーストのほうが人為的に息子を多く持ちはじめているのである。女性たちもまた、下位の男性とあえて結婚するよりも、カーストの掟に従うことで社会的特権を維持することを望んでいる。日本とは比較にならない女性キャリアの地位がこれを示している。

インドのジェンダーのこのような現実を男女数の比率から見てみよう。

〇才から六才の子どもの男女比は、男子一〇〇〇人に対して、女子は一九九二年から九三年で九三四人、九八年から九九年で九二六人、二〇〇五年から六年で九一八人である。発表され始めた二〇一一年の国勢調査結果では、さらに下がって九一四人となっている。高度経済成長と比例して男女差が広がっている。出生率に限ってみると、女子は一九八七年から九一年が九四一人、九三年から九七年が九三八人、二〇〇〇年から〇四年が九一九人である。女児の人工妊娠中絶が増えている。これを経済的な階級別の統計で見ると、女児数は、〇才から六才の子どもの場合も出生時も、豊かな階級になるほど減少している。最も豊かな層では息子一〇〇〇人に対して娘を八五四人しか産んでいない。しかも学歴別にみると、義務教育の一〇年生より上の女性の場合、超音波診断をうけた女性が産んだ女児数は八三〇人である。

死亡率でみると、十一ヶ月未満の幼児の死亡率は貧困層ほど高く、しかも女児の死亡率が男児を上回る。全体では一〇〇〇人のうち、女児二一人に対して男児十五人である。最貧層では五才までで二五人の女児が死に、男児は十九人である。一方、最富裕層ではそれぞれ八人と六人である。貧困層では出産後の女児の間引き、あるいは病気の女児を放置するなどの理由がある。

これらのデータから、[20] インドでは金持ちで、かつ母親に教育がある家庭ほど娘よりも息子をかなりの割合で多く持っていることがわかる。息子を選んで多く産み、大事に育てる。一方、下層カーストの場合は政府の家族計画手術を受けているので中絶は少ない。しかし、女児の死亡率は高い。いずれの場合も、インドにおける「女のカースト」の大変さを如実に示しているのが人口の男女比である。これは州によっても異なる。南インドのすべての州で男女比は大きく、男児一〇〇〇人に対する女児の出生は九〇〇から九四二人である。北部と西部の州では、この差はさ

らに極端になる。

インドにおけるジェンダーはこのようにカースト制度と関係しているが、宗教的な観念によるだけではなく、政治的、経済的な要因も大きい。「女は穢れている」と信じるよりも、現実の社会の権力関係のなかで、女が生きるための知恵を祖母や母たちから教えられ、身につけている。そうせざるをえないともいえる。一般に低カーストの女性たちも「先祖からの共同体」を守る意識は強い。家族が祖先に守護してもらえるように、浄性の掟を守ることが「女のカースト」の大切な役割だと、小さい頃から教えられて育つからである。[21] 慣習に従わなければ農村では村八分にされる。しかし、カースト制度が維持されるかぎり、ダリットやアディヴァーシの女性は差別されつづけることになる。

インドのいわゆる近代化は一九九〇年代からの市場開放政策と共に強まったが、同時に原理主義的なヒンドゥーナショナリズムも広がった。インドは民族的にも文化的にも非常に多彩な世界である。歴史的にも多様な宗教が共存している。しかし、イギリスからの独立闘争のなかで、M・ガンディーに見られるように、国民統合の精神としてヒンドゥー・スワラージ（「インドの自治」）が持ち出された。[22] 近年のグローバル化のなかでヒンドゥーナショナリズムが再び勢いを増し、イスラームとの二元的な対立を煽っている。先に引用したロイは、ガンディーは魔法のランプをこすってラーマとラヒームを呼び出し、人間的な政治とイギリスからの独立闘争にこのエネルギーを利用した。しかし状況が変わった今も、このランプの精はランプから出たきり戻ろうとしないのだ、とヒンドゥーナショナリズム的な支配を批判している。[23]

このような状況下の暴力と軍事大国化は、むろんインドに限らないが、ジェンダーの問題と切り離せない。ナショナリズムによって文化的アイデンティティが平準化され、軍隊や警察による物理的な暴力を伴う多重的な排除が起きる。ある地域なり共同体がナショナリズムの敵として、あるいは「公共の利益」を損なう集団として攻撃される時、その「敵の体」を破壊するための武器として、女の身体が辱められる。攻撃される側も家父長的な共同体であれば、「女の場所」が狭められるだけではない。男たちに代わって共同体のために戦う「強い女」の役割も担わざるをえなくなる。ジェンダーの強化と再編が起きるのである。

インドの農村部では低カーストの男たちのフラストレーションが飲酒やドメスティック・ヴァイオレンスとなっている。しかし、より典型的な例は、軍事支配がつづくカシミールや東北インドで、あるいは鉱山開発がつづく中央インドでみられる。世界のメディアからも国内のメディアからも無視されたところで軍隊や警察、あるいは準軍隊による殺害や失踪、逮捕、拷問、レイプなどの残虐行為が頻繁に起きている。メアリー・カルドーが指摘しているように、カシミール紛争は「新しい戦争」の典型である。国家の軍隊が市民や女性を敵として攻撃する。万一批判され

ても、戦争の副産物として、「やむを得ない人権侵害」にしてしまう。[24] しかし、カシミール問題はたんに領土をめぐるパキスタンとの戦争ではない。インドが大企業グローバル化に比例して軍事大国化するのを正当化し、その暴力は巨大ダム建設の現場で、あるいは鉱山開発や原発建設地で、貧しいダリットやアディヴァーシに向かっているのである。

一方、これらの現状のなかで主体的に活動する下層女性たちが、インドの深い農村や森林地帯に変化をおこしている。そこでこの点について具体的に検証したい。

2　インドのマイクロクレジットと貧困女性のＳＨＧ

二〇〇〇年の国連ミレニアム総会で、ミレニアム開発目標（MDGs）が決まった。そのなかで今日の貧困を深刻な人権侵害と位置づけている。しかし、一日二ドル未満で暮らす二六億人を二〇一五年までに半減するという達成目標は絶望的な状況にある。一方で各国政府やＮＧＯ、社会企業（ソーシャル・ビジネス）などが、貧困問題の解決のためにさまざまに取り組み、部分的ながら成果をあげているのも事実である。

インドには、貧困層対象のマイクロクレジットに基づくＳＨＧ（Self Help Group）政策がある。一九九二年にパイロットプロジェクトとして南インドの二五〇グループから始めたＮＡＢＡＲＤ（The National Bank of Agriculture and Rural Development）の統計によると、二〇一二年現在、全インドで諸銀行とリンクした七九六万のＳＨＧがあり、一億三千万人以上が会員になっている。その内の七九・一％が女性だけのグループである。二〇一一年度のＳＨＧによる銀行預金の総額は六五五億一千万ルピーであり、女性グループのものはその七七・九％である。一方、ＳＨＧに貸し出された銀行ローンの総額は、一六五三億五千万ルピーで、女性グループがその八五・五％を占めている。[25] 後述するように銀行以外のさまざまなマイクロファイナンス機関（ＭＦＩ）も増大している。一ルピーを二円と換算しても、一日五〇円以下で暮らす極貧世帯が多いことを考えれば、インドのＳＨＧの預金総額およびマイクロファイナンスのローン総額がいかに巨大なものであるかがわかるだろう。無担保で少額の信用貸し付けであるマイクロクレジットから金融機関にとって利益を生む融資（ファイナンス）へと変化してきている。二％の低額とはいえ利子がつき、会員個人のローン返済もグループの連帯保証つきだからである。

ムハンマド・ユヌスがバングラデシュで始めたグラミン・バンクの成功が世界中にマイクロクレジットを広げたことはよく知られるが、イン

ドの場合は他国と方法が少し異なっている。特定の銀行あるいはマイクロクレジット専門の機関によって行われているのではなく、国営銀行の他、一般の商業銀行や地域の農業銀行、信用組合などがＳＨＧを顧客としている。但し、銀行や政府によってではなくＮＧＯによって作られた（これらを SHPA、Self Help Promotion Agency と呼ぶ）ＳＨＧでも、口座を開く金融機関はその住所によって限定される。信用金庫はもとより選択の幅はない。グジャラート州のＳＥＷＡのように、自らの女性銀行をもつ場合は例外的である。

当初、インド政府はマイクロクレジットを広げるためにＮＧＯにＳＨＧつくりとトレーニングを委託したから、タミル・ナードゥ州のようにＮＧＯが強い南の四州[26]からＳＨＧが増えていった。ＮＡＢＡＲＤの統計では、二〇〇〇年度末に、全インドのＳＨＧ総数はまだ十一万五千にすぎないが、その六七％は南インドにある。二〇〇二年には全インドで四六万のＳＨＧとなり、ＳＨＰＡとして認可されたＮＧＯは一二〇〇、銀行や州政府などの融資機関は三一五に増えた。銀行とリンクしたＳＨＧがインド政府の補助金政策によって二〇〇〇年から飛躍的に増えている。資金としてはフォード財団や国際基金からの協力金が使われた。

一方、二〇〇七年からＮＧＯの役割が抑えられ、政府が直接にＳＨＧを管理し始めたのだが、この時点ですでに全インドに二九二万四千のグループがあり、すべて女性グループである。その五八％がまだ南インドにあり、銀行ローンの総額は一三五四億七千万ルピーで、全体の七五％を占めている。ただし、上記した二〇一一年の数字と比較すると、全国のＳＨＧ数がその後約八〇〇万へと激増している割には、貸し出される銀行ローンが増えていないことがわかる。これにはいろいろの要因があるだろうが、ＳＨＧつくりを担ったＮＧＯの目的、およびローンの主な借り手である貧困女性のグループの活動の変化が考えられる。

ＮＧＯには欧米から活動資金を得やすいキリスト教系が多い。タミル・ナードゥ州は七二〇〇万余の人口であるが、インドの平均（二・三％）と比べてクリスチャン人口が多く、六％を越える。イスラーム人口もほぼ同様である。ＳＣの比率も高く、約十九％である。単純計算ではタミル・ナードゥ州の約三割がダリット人口である。

開発ＮＧＯのリーダーには知識階層のダリット・クリスチャンが多い。そこで農村のダリットやアディヴァーシ間にＳＨＧを積極的につくろうとしてきた。ＳＨＰＡに占めるＮＧＯの数を政府機関および銀行のそれと比較すると、政府がＮＧＯ活用によるＳＨＧ政策を始めた二〇〇〇年にはＮＧＯの比率は六六％だが、二〇〇六年末には二八％へと抑えられ、政府機関が五一％に増えている。[27]この傾向はその後、さらに進んできており、現在は、ＭＦＩとして資金源のあるＮＧＯのみが中心的に残っている。

同じSHPAでもSHGつくりの目的、とくにそれに伴うトレーニング内容が異なる。インド中央政府は女性エンパワーを意味するストゥリ・シャクティ・プログラムによって、二〇〇〇年からSHGの促進を開始した。また、貧困ライン以下の農村の家族をSHGによって自営させようというSGSY（Swarnajayanti Gram Swarojgar Yojana）プログラムが一九九九年に始まった。これは一九八〇年代からの「農村地帯の女性および児童の開発」（DWCRA）プログラムと統合され、ダリットやアディヴァーシにとって重要な政策となってきた。州政府もまたそれぞれの貧困女性の開発プロジェクトを開始した。タミル・ナードゥ州では、マティ（MaThi）プログラムによるSHGつくりがNGOの強力な支援によって行われた。これらの結果が、上記したような驚異的なSHG数と預金総額、銀行ローン総額となっている。また、南インドが識字率や教育レベル、平均寿命などで全国平均を上回っているのもその成果といえるだろう。

NGOの目的は、これらの政府プログラムに参加することによって、貧困解消だけではなく、女性の識字率、教育、栄養、保健、母子健康、子殺しや児童労働などについて具体的に啓発を行うことにあった。IWID（Initiatives: Women in Development, India）の調査によると、[28] SHPA間でのSHGつくりの目的の違いは明確である。例えば、NGO、銀行、政党、政府機関、宗教団体は、貧困を減らすこと、女性のエンパワーメントという基本原則では同じである。しかし、暴力に抵抗すること、政治参加の確保、ダリットのエンパワーメント、ダリットの政治参加の確保、などを目的にするのはNGOのみである。環境保護と村の共有資源を高めることについてはNGOと政府だけが目的に入れている。これらの目的を実現するためにNGOによるグループやリーダーのトレーニング内容はさらに具体的である。しかし、NGO間の相違も当然ながら大きく、どのNGOによって作られたかがグループの性格、成功と失敗の内容を決定するほどである。

3　タミル・ナードゥ州メルマライヤヌル地区の変化

3－1　地区の特徴とWOLD

タミル・ナードゥ州にはNGOが多いが、それも地域によって異なる。筆者が調査したメルマライヤヌル地区はヴィルップラム県のなかでも最も内陸部で交通の便が悪く、しかもコミューナル衝突が多発していたために、NGOが活動しにくく、また外部から入っても長続きしないところだった。この地区に二〇〇〇年からの十年間に約一〇〇〇のSHGをつくったのがWOLD（Women's Organization for Liberation and

Development）である。
ＷＯＬＤは代表のプレマ・Ｓ・クマリの父親がこの地区の村のダリット・コロニー出身であり、親族もいることから、一九八一年来この地区内に農村女性トレーニングセンターを作って活動してきた（一九八五年にWOLD Trustとして登録）。フルタイムのスタッフも臨時のワーカーも全員がこの地区または近隣地区の住民である。草の根の性格をもったダリット女性の小さなＮＧＯである。ドービー（洗濯カースト）のようにダリットのなかでもさらに低い階層の発展のために、講のような貯蓄グループづくりを勧めながら活動していた。洋裁教室や学校をドロップアウトしたダリットの若者たちのための識字教室も開いていたが、ダリットの進出を阻む地主カーストからの数々の妨害にあってきた。しかし、ＷＯＬＤのような自家用車も持っていない弱小ＮＧＯが政府からＳＨＧつくりの認可を得ることは困難だった。

九〇年代のインドのＳＨＧプログラムは、ＩＦＡＤ（International Fund for Agricultural Development）から資金を得ていたので、半エーカーの自分名義の土地または50セントを所有していることが入会条件だった。ダリット女性はほとんどが土地無しの日雇い労働者で、当時は五〇セントですら自分の金を持っていなかった。日当も夫や父親に渡された。ＩＦＡＤはダリット女性にはまるで益のないプログラムだったのである。しかも、女性開発局から認可を受けたＮＧＯによって地区の管理者が任命され、その管理者がグループの貯蓄を集金してまわり、銀行に預けるという仕組みだったから、グループと銀行との直接のつながりがなく、グループは管理者に全面的に依存していた。これでは貧困女性のエンパワーメントはむつかしい。

ＷＯＬＤのプレマ・Ｓ・クマリは、一九九五年の第四回国連女性会議のＮＧＯ会議にインドのダリット女性の代表として参加した。この時に政府間会議で採択された十二項目の行動綱領の実施を求めてその後も行動してきた。一九九七年のワシントンでのマイクロクレジット会議にも参加して、土地要件などを解除するように街頭ラリーで訴えた。このようなダリット女性たちの国際的な行動が農村の貧困女性のための新たなＳＨＧプログラムをインドにもたらしたといえる。インド政府も農村貧困女性のためのさまざまな施策を打ち出した。

ＷＯＬＤはダリット女性たちが置かれている極端な貧困と差別、暴力をＳＨＧ活動によって解決しようと考えた。そこで政府の新たなＳＨＧプログラムに参加しようとしたが認可を得ることができず、一九九二年からタミル・ナードゥ州でＩＦＡＤグループつくりをしていたＫＫ（カルヴィ・ケンドラ）に加入した。ＫＫは一九八三年に創設された開発ＮＧＯである。代表の男性はプレマ・Ｓ・クマリの夫の高校の教え子で、ＷＯＬＤで働いていたこともあったから、二〇〇〇年からＷＯＬＤがメルマライヤヌル地区でＳＨＧつくりを始めた後も、ＷＯＬＤの独自性を

尊重した。また、毎月のＫＫのスタッフ会議においては、プレマ・Ｓ・クマリがジェンダー・イニシアティブを指導してきた。ジェンダーの視点を入れてＳＨＧを育てることは、たとえスタッフやワーカーが女性であっても、その意識がなければ困難だからである。

メルマライヤヌル地区は、五五のパンチャヤート（インドの最小の行政単位としての自治体）からなり、一八二の大小の村落がある。このなかに村外れなどに位置する四七のダリット居住区、三七のＳＴ居住区も含まれる。二〇〇一年の国勢調査では地区の総人口は約十二万二千人で、その内のＳＣは約一万九千人、ＳＴは約二千人である。いずれも男女差はなく、女性のほうが僅かながら多い。メルマライヤヌル地区開発局（**Block Development Office**、局員六〇人）によれば、二〇〇八年の総人口は約十七万四千人で、女性のほうが二千五百人ほど多い。ＳＣとＳＴ人口は合わせて約十七％であるが、クリスチャンとムスリムのダリットはここに含まれない。

ＩＦＡＤグループもなかったこの地区に、ＷＯＬＤは二〇〇〇年に最初のダリット女性のＳＨＧから始めて、「その他の後進諸階層」（ＢＣ、ＭＢＣ）へと広げていった。二〇〇四年には全部で約三五〇グループ、二〇〇八年に七〇〇グループ、そして二〇一〇年にはグループ数が九八五になった。その三分の一余がダリット女性のＳＨＧで、その他にダリットと一般カーストや宗教間の混成グループもある。一つのグループを十五人平均としても、ＷＯＬＤを母体としてこの地区に約一万五千人のＳＨＧ会員が十年間に誕生したのである。ＷＯＬＤ自身もセンターを住所としてスタッフとワーカーがひとつのＳＨＧとなった点でもユニークである。ほぼ全員が政府の配給カードを所持する貧困層に属するからである。

ＷＯＬＤはすべてのグループをまずパンチャヤート・レベルで、次には地区内の五五のパンチャヤートを各五づつに分けた十一のクラスター・レベルで、そして地区全体という三つのレベルでの連合体（ＰＬＦ、ＣＬＦ、ＢＬＦ）の構造にして、個別のＳＨＧの役員以外にも、各連合体の役員を選出し、定期的な会議を行うように指導してきた。同じパンチャヤット内の複数のグループや会員間の協力関係つくりが、カーストの壁をこえるために不可欠だったからである。同じダリット居住区内でもグループ間の協力が女性たちを強めた。それでもパンチャヤートによってはカースト村にグループがなかったり、ダリット居住区はクリスチャンだけだったりと違いがある。パンチャヤートをこえて近隣の貧困女性たちの団結をはかることで、パンチャヤート内では解決できない問題を解決しようとしたのがクラスター・レベルでの連合だった。ＷＯＬＤは政府の事業計画で貧困世帯が入手可能なものについてのオリエンテーションをここで行っていた。

地区全体レベルの委員会では、政府の農村用施策やダリット女性のための特別プログラムなどの多くの情報が政府の担当役人の支援をえて共

有された。また、ＷＯＬＤ農村センターで開かれる毎月一回の地区レベルの集まりには誰が参加してもよかったから、その日は終日、相談事をかかえたグループやアニメイターたちで賑わっていた。

一方、ＳＨＧの活動によって地区全体が変わり始めてから、またスマトラ沖地震によって海外からの資金が流入した時に、それを利用したＮＧＯが二〇〇五年以降にこの地区でも活動を始めた。ワールドビジョンとハンド・イン・ハンドである。これらは自らがローンを提供するマイクロファイナンス機関（ＭＦＩ）でもあった。両者がつくったＳＨＧの数は不明だが、ＫＫの名前でＷＯＬＤがつくったグループと政府、銀行などが二〇〇七年以降につくったグループもすべて合わせて、二〇一〇年には一六五〇のグループが数字上ではできていた。一時期、ＷＯＬＤはこれらのグループもパンチャヤート・レベルの連合体に参加するように呼びかけていた。しかし、後述するように、ＷＯＬＤがつくった独自の連合体はもはや機能していない。政府によって役員が総入れ替えされたのである。

最大の問題は、政策の変更によってＳＨＧのルールが緩み、チェック機能も弱体化したことである。母体が異なる幾つかのグループ間を移動したり、複数のグループの掛け持ち会員が増えており、その実態が誰にも把握されていない。また、実際は解散しているのだが、僅かの残金で銀行口座だけを残しているグループもある。二〇一〇年九月に面談した地区開発局のＳＨＧ担当者によれば、一二五のグループが優秀、七四五のグループは継続的に活動しており、ローン返済もきちんと行われているということだった。政府はグループの正否を預金高、ローン高、ローン返済という金銭活動で把握しているので、他のグループは何らかの金銭上の問題を抱えているということになる。ダリットやアディヴァーシのグループの大半がここに入る。しかし、ダリット女性運動体でもあるＷＯＬＤが目指したように、貧困解決だけがＳＨＧの目的ではなかった。

３-２　ダリット女性の変化

ここで政府が当初、ＮＧＯに委託したマイクロクレジットＳＨＧつくりのルールと、ＷＯＬＤのトレーニング内容、そして、この地区のダリット女性がどのように変化したかを見てみよう。

ＳＨＧの会員資格は、同じ村に居住すること、二〇才から五〇才までの女性、但し、寡婦と極貧者は年齢を問わない、貧困ライン以下であること、会員数は十二人から二〇人までであること、会員は会費を払うこと、である。[29] ＮＧＯは村を訪ねて、この資格に当てはまる女性たちに会って説明し、彼女たちの中でリーダーになれる女性を選ぶ。メルマライヤヌルのように辺鄙で貧しく、乾燥した広大な地域に村が離れて点在する

農村地帯では、この時がＮＧＯの女性ワーカーにとってもっとも危険かつ大変である。昼間は田畑などでの賃金労働があるから、夜を待って集まりをしなければならない。女性たちも仕事から帰ってきても、暗くなる前に水くみや食事つくりを済ませなければならない。ようやく話し合いができても、帰路、低カーストの女性のグループつくりに敵意をもつ地主や男性たちに襲われる危険だけではなく、交通の便のない暗い夜道にはコブラとサソリが多い。

グループが結成されると、会員はグループの実質的なリーダーのアニメイターと銀行との取引に責任をもつ二人の代表役員を選ぶ。ほとんどの会員は読み書きができず、年齢もあいまいな中で、少しでも識字能力のある女性がアニメイターに選ばれる。つぎにグループの名前を決めて指定の銀行に口座を開設する。この後、グループは会員名簿と銀行預金の写しを担当ＮＧＯに提出する。

ＮＧＯは女性開発局（ＷＤＣ）の承諾を得てから、まずアニメイターと代表の基本トレーニングを自分たちのセンターで行う。その内容は、グループの記録のとり方と維持方法、毎週の集会の持ち方、アニメイターの責任範囲、代表との連携の仕方、ＳＨＧ活動について会員との議論の仕方、銀行からお金を引き出す際のグループの承諾書の作り方、グループにお金を配当する時の計算書の作り方などである。この後にグループのメンバーに対する最初のトレーニングを行う。会員はＳＨＧ活動によるさまざまなメリットをまず理解し、会員の責務についても学ぶ。

会員の責務とは、毎週の定例ミーティングに参加し、決議ノートに署名しなければならないこと。この時にのみ週毎の預金額をアニメイターに払い、各自の通帳にアニメイターの署名をもらうこと。（グループ毎に定額を決める。当初は一週間で皆が工面可能な五ルピーないし一〇ルピーだった。）グループ活動に関する一切のことはこのミーティングにおいてのみ話し合うこと。ミーティング以外で決めてはならない。アニメイターは話し合いの内容を記録して全員の署名をえること。会員はグループ名義の自分たちの預金を毎週、順番に銀行に持って行って預け、そのレシートをアニメイターに渡すこと。アニメイターがグループの口座を管理しているので、会員は預金高について疑念があればアニメイターに問いただすことができる。アニメイターは記録を明示しなければならない。各会員は月に二ルピーをグループ用に、二ルピーをパンチャヤート連合（ＰＬＦ）用に会費として支払うこと。この積立金がグループやパンチャヤート・レベルでの活動費となる。

二人の代表の役割は、ＳＨＧローンをメンバーに渡すために銀行からお金を引き出すことである。グループの印を押した払い戻し用紙の記入の仕方を覚え、お金を引き出してきてアニメイターに手渡す。グループ・ミーティング時にアニメイターと二人の代表が一緒にローン額を会員に分配する。会員は各自の会員通帳を所持している。そこにローン額、返済額、残高、支払い利息を記入するスペースがあり、アニメイターが

各人の通帳にこれらのすべてを記載し、署名しなければならない。グループ全体の銀行取引についてはグループの原簿に記入する。パソコンなどはなく、すべて手書きである。

ミーティングにおけるグループの討議内容の記録も大事だが、ローンの明細記録の正確さが非常に重要となる。すべての会員はまず自分の名前の署名をおぼえ、バスの行き先と数字も読めるようにするが、アニメイターの記録能力が不十分な場合に問題が起きる。グループ外の人間、たとえば夫や村の高カースト、あるいはＮＧＯの担当者にノートの記録を依頼しているグループは依存的になり、問題がおきやすい。

インドのＳＨＧはローンを借りることをいわば原則としたプログラムである。貧困層はこれまで銀行とは無縁であり、ほぼ全員が地主などからの高利の借金に縛られて生きてきたから、政府の補助金のついた低金利ローンがＳＨＧの最大のメリットであることは言うまでもない。後述するように、どの会員も例外なくこの点を述べている。例えば、一つのグループが会員二〇人で結成されると、最初の三ヶ月間に各自が毎週一〇ルピーづつ貯金すれば、グループの銀行口座は約二五〇〇ルピーとなる。そこで次の三ヶ月の間に、各自は月に二ルピーの利子で五〇〇ルピーのローンを借りなければならない。グループ全体では一万ルピーである。この三ヶ月が過ぎると、ローンの使い方と返済、アカウントの正確さなどについて政府からチェックされる。この監査を無事にパスできると、そのＳＨＧの銀行口座には政府から五万ルピーのローンが振り込まれる。その内の一万ルピーは補助金である。四万ルピーを二％の利子で五〜一〇回払いで返済する。このローンの返済が済むと、さらに一〇万ルピー、二〇万ルピーとローンを増やしていかなければならないが、補助金も増加する。補助金の割合は、ＳＣとＳＴのグループの場合は、先に述べたＳＧＳＹプログラムなどによって五〇％となる。利子が不要な回転資金の制度もある。これらのローンをどのように使うかによってグループ活動の正否がきまる。

会員個人はグループ貯金から借りることも、政府ローンや銀行ローンから借りることもできる。しかし、低金利で簡単に借りられても、高額のローンの返済は本人または家族に収入の道がなければ困難である。しかも、もし返済ができなければグループ全体の責任となる。グループの不和の原因やアニメイターのリーダーシップの問題となる。そこで、ＮＧＯはＳＨＧのグループとしての起業や会員の自営の相談にのり、さまざまなトレーニングを行い、また必要に応じて現場で手伝っている。ＳＨＧローンの複雑な申請手続き時だけではなく、ＮＧＯはグループの個性と活動内容をきちんと把握し、必要に応じて相談にのり、指導できることが非常に重要である。

ＷＯＬＤはダリット女性がＳＨＧを利用できるようにと政府の事業に関わってきたが、この地区のＳＨＧはダリットだけではなく、地区人口

の大半を占める後進諸階層の貧困女性たちのなかにも広がった。ＷＯＬＤは農村女性センターで行うＳＨＧトレーニングにおいて、ほとんどの会員が文字を読めず、自分の生き方や環境について何かを学ぶという機会を持ったことがない地区で、一連の継続的なトレーニング・プログラムを提供してきた。このトレーニング・パッケッジは、当該グループの必要性を調べることによって、それぞれのグループが知識を広げ、能力を開発できるようにしたもので、主に次の５つの領域のトレーニングを組み合わせている。１　社会分析　２　態度の変化　３　リーダーシップおよびパンチャヤートの発展　４　手続きに関するトレーニング　５　スキルの上達である。

これらのプログラムを成功させるためには、文字や言葉によってではなく具体的かつ実践的に行わなければならない。そこで、ＷＯＬＤがまず試みたのが、ダリットと一般カーストの「共食」である。また、村内の混成グループつくりやパンチャヤート・レベルの集会でのカーストや宗教をこえた交わり、具体的には身体の接触と共通目的のための共同行動を組織することだった。これによって、カーストができてからおそらく二千年以上もの間、カースト外の「不可触民」として動物以下の穢れた存在、人間ではないかのように差別されてきたダリットの女性たちが、法律によってではなく、日常の行動において自分に自信をもって劣等感を克服できるのである。それは衣食住、言語、宗教、子どもの教育、行動範囲、活動内容、さらには夫や家族との関係の変化に現れている。

ＷＯＬＤはダリット女性が生きることに自信をもつために、ダリット自身が変われるようにトレーニング内容を工夫した。例えば、ダリットには許されてこなかった服装、サリーの下にブラウスを着ることや、上層カーストのようなサリーの色や着方をすること。サリー一枚の替えも持っていなかった着たきりの女性たちに、自分のお金で自分のために、自分でサリーを買い、おしゃれをして集まりに来るようにすること。インドでは階層を問わず、男性が妻や娘や親族のためにサリーやチュリダー（パンジャビ・スーツ）などの生地や衣服を買うのが普通だった。外での買い物は男の仕事だから、女性はもらったものを身につけるだけだった。また、櫛で髪をとかせば、「売春婦だ」と言われるので、ダリットの女性は長い髪でも手櫛だったが、いつも小さい櫛を身につけるようになった。また、主食の米も食べられない生活なので、タミル・ナードゥ州ではカースト民の朝食である米粉を発酵させて蒸してつくるイドゥリや油であげるドーナッツのようなワレイなどの作り方も知らなかったから、料理講習会をした。その他、銀行や役所へＳＨＧの用事で行く時の挨拶の仕方やダリットの方言ではない言葉使い、集会にゲストを招いた時のグループを代表しての歓迎の言葉やグループ報告の仕方などである。

宗教的にも、これまでは不浄なダリットには許されなかったが、神々や客を迎える時のヒンドゥーの上層カーストの宗教儀礼であるアールティ

などもミーティングなどで実践的に行った。村の寺院に入ることはそれまで許されなかったが、ダリット居住区に小さい寺が立ち、村のバラモン司祭の寺院と変わらないようなプージャ（礼拝）が行われるようになった。

住居についても、これまでは体を二つ折りにしないと入れないような低い入り口の泥小屋だった。しかし、これがカーストの人たちの前で今でもすぐに身をかがめる癖につながっているということから、ＳＣ用の住宅補助金を使って、体を屈めなくても普通に入れる家にしようという啓蒙活動になった。また、地主の田畑以外は村の外へ出たことのない女性たちのために、女も自転車に乗ろうと、姿勢をまっすぐにして堂々と自転車に乗るトレーニングをした。ＷＯＬＤはまた、ＳＨＧ用の女性歌を替え歌のようにしてつくり、ダンスの身振りをつけて、集会毎に歌い、男の飲酒と暴力に対抗するスキットも指導した。

ＷＯＬＤは一般カーストの貧困女性たちも古い意識を変えられるようにと工夫した。このための重要な、高いハードルをまたぐ行為が「共食」と地区のＳＨＧ会員すべてに共通の制服用サリーの制定と着用だった。

政策変更まではトレーニング時に政府から頭数の昼食代がＮＧＯに出た。ＷＯＬＤセンターでは参加者用の昼食を作るのはダリットである。ダリットから水や食べ物を受け取らないこと、ダリットが調理したものを食べないこと、身体を接触しないことがカーストの掟であるから、当初はダリットの参加者しか食べなかった。しかし、ＷＯＬＤは質素だが非常に味の良い昼食（菜食）で評判を得た。さらに、経費を上回ってもゆで卵を一個つけたりした。「トレーニングの参加者を空腹で帰さない」というのがプレマ・Ｓ・クマリの信念だった。食事は作っても家族の残り物を食べるのが女性だから、いつも空腹で、しかもゆっくりと座って食事などしたことのないのが貧困女性である。それも大半が日に一食かせいぜいで二食しか食べられない。貧しくて持参する弁当もない後進カーストの女性たちは、タブーを破って、徐々にＷＯＬＤの食事を食べ始めた。ここでは誰の目も気にすることなく、たとえ「不可蝕民」と一緒でも、ゆっくりと食事を楽しむことができるのである。「村ではできないが、ＷＯＬＤのセンターでならいい」という女性も多い。

それでも、ゆで卵をそっとサリーの胸にしまう女性があった。卵を食べない菜食主義か、または家族のために家に持ち帰るのである。カーストの掟を家族の安寧のために守ることが女の役割だと信じられている。女が浄穢の掟を破ると、家族に不幸が起きるとされる。南インドではダリットは一般に牛肉を食べる。その他の低カーストにも非菜食が多いが、高カーストが菜食主義であるために、低カーストも表向きや家庭では菜食主義というのがふつうである。夫や息子が外食で酒を飲み、肉や魚を食べていようと、女性は家族のために食事のタブーを守っている。これは

ＷＯＬＤのスタッフにもほとんど当てはまる。

ダリット以外にも「その他の後進諸階層」のＳＨＧが増えてきたので、上層カーストのヒンドゥー教徒で大学院出の女性Ｖ（三二才）が一人スタッフに加わっていた。Ｖは自分の村のＳＨＧの元アニメイターで、三人の子どもの母でもある。役所や銀行とも対等に交渉することができた。センターへは自宅から徒歩とバスを乗り継いで来る。ＷＯＬＤで働くほどの平等な意識をもった知的な女性だったが、当初は他のスタッフと離れて座り、ダリットがつくる食事どころか水も三時のお茶も飲めなかった。しかし、彼女は徐々に変わり、一緒に働くダリットのスタッフやワーカーにとっても新しい交わりの経験となった。上層カースト女性たちにとってもＶはカーストの掟を破ってもいいという身近なモデルになった。

ＷＯＬＤがつくったＳＨＧの制服は、淡いブルーの地に白い縞模様のラインが入ったサリーである。一着一九五ルピー（当時で四百円弱）だが、それでも買えない女性にはＷＯＬＤが援助していたから、メルマライヤヌルの至るところで、ときには地区外の町でもこの制服姿の女性に出会った。まだ制服がないとき、銀行にグループの貯金を預けに行っても、他の客や銀行員から場違いな女が来たというような目で見られた。制服姿なら、ＳＨＧの用事だろうということで、村を出る時も、村の外でも言い訳をする必要がない。村の中に堂々と入って行っても、制服姿ならダリットだからと咎められない。制服なら上等のサリーと貧しいサリーの貧富の差がない。カーストや宗教をこえて一緒に街道を歩ける。集会やラリーでは何百、何千人もの同じ制服姿の女性たちが圧巻の行動力をみせるようになった。ＳＨＧの数が増えるにつれて、制服の威力はＷＯＬＤが意図した以上の効果を生み、もう制服を着なくても大丈夫なまでになった。ところが政党がＳＨＧ制服の威力を選挙活動で利用するようになったのである。ＷＯＬＤは選挙用の集会での制服着用を禁止した。

このようにＳＨＧによってこの地区のダリット女性たちは大きく変化した。自分の名前の署名を覚えたので、銀行支配人にもグループの通帳に本当に入金されたかどうかの確認の署名を要求するほどになった。これまではサリーの着方（サリーの手を右側にする）でバスに乗っても、町の寺院でも、ダリットだとすぐにわかるようにされていたが、そのことに疑問を持ち、一般カーストと同様に着始めた。また、髪をとかし、上層カーストと同様に花や飾りを着けるようになったので、外見ではダリットとわからなくなった。現金を持ち、これまでは男の仕事だったマーケットなどでの買い物も、自分たちでするようになった。食事においても、余裕のある上層カーストではライスに副食をつけ、サンバル（カレースープ）、ラッサム（胡椒スープ）、カードゥ（ヨーグルト）と順番に食べるが、ダリットにはそのような習慣がなかった。ミルクを買えないのでブラックティーが習慣になっていたから、ブラックティーを飲むのはダリットかアディヴァーシだとされてきた。しかし、ＳＨＧのローンで

乳牛や山羊を飼い始めたので、家内でも紅茶にミルクを入れるようになった。ＷＯＬＤの健康トレーニングによって、食事の前に手を洗う習慣もつけた。現金を持ち、これまでは男の仕事だったマーケットなどでの買い物も、自分たちでするようになった。

プレマ・Ｓ・クマリが「このようなダリットの変化を見られただけで、もう死んでもいい」と述懐したほどである。

３－３　ＳＨＧの活動内容と地域の変化

この地区の幾つかの特徴的な村からＳＨＧの活動をみてみよう。

マーナンダル村のダリット居住区には二〇〇八年の時点で六つのＳＨＧが活動していた。すべてＷＯＬＤが作ったグループである。そのなかに二〇〇六年以降に認可された一八才以上の独身女性のグループと男性のグループが各一つある。女性グループのなかで二〇〇〇年から活動しているのは一つのみである。筆者が訪ねた時、ＳＨＧ用に政府が建てた小屋に五つのグループの女性たちが集まって、制服のサリー姿でびっしりと座っていた。髪もきっちりと梳かしている。ＷＯＬＤのスタッフの指導でＳＨＧの歌を歌い、それぞれのグループ活動報告をし、誰もが生き生きと自分の意見を言う光景は、目を伏せて人前では発言できなかった以前とは大変な変わりようである。小屋の前には小さいながら真新しいヒンドゥー寺院も建っている。この村は全員がヒンドゥー教徒である。

新しい四つのグループの特徴は、グループ起業への関心は薄く、個々人がローンによって乳牛を飼うなどしている点である。グループローンの額もまだ五万ルピーか一〇万ルピーである。誰もがＳＨＧのメリットとして、以前は高利で金を借りていたのに今は緊急時でも自分のグループから低金利で借りられるという安心と安全性を挙げている。また、貯金ができローンも得られるようになったことで、自分に対する夫の態度が変わったという女性も多い。酒を飲んで帰り、妻に暴力をふるう男はダリットに特に多かったからである。

カースト差別についても、ＳＨＧをつくってから自分たちの意識が変わった、もうカースト間の差はない。劣等感がなくなり、カースト民とも一緒に歩けるようになったという。上層カーストはヴァニヤース（ＭＢＣ）のみであるが、この村はダリットにＳＨＧ会員が増えて、しかも村の改善のために協力しあっていることが成功につながっている。

マーナンダル・パンチャヤートは人口が二千八百人余（二〇〇一年統計）で、ＳＣ人口はその約二〇％である。ＷＯＬＤが組織したマーナンダル・パンチャヤート連合には全部で一五のＳＨＧがあった。この連合の組織的な働きで村に井戸水ができたことが二〇〇八年の大きな成果だっ

た。マーナンダル村には飲料水がなく、女性たちは数キロ離れた井戸へ水汲みに行っていたが、それも汚染した水だった。ＳＨＧが協力してパンチャヤートに訴えていたのだが、返事はなかった。そこで、連合の全グループが一緒に制服姿で街道をデモ行進して、バスや他の乗り物を止めた。地区の開発担当役人が来た時に、適切な対応を約束させたのである。現在、マーナンダル村の女性たちは、ダリットも上層カーストも、水パイプやポンプ式の井戸によって、村内で飲料水を得られるようになっている。水汲みは女性にとって最も重い家事労働であるから、村人はＳＨＧの団結と勇気ある行動に感謝している。

マーナンダル村とは対称的にダリット人口の大半がキリスト教徒であるのがサータンバディ村である。サータンバディ村のダリット居住区には、プロテスタント（ＣＳＩ、南インド教会）が約一五〇世帯、カトリックが約三〇世帯、それにヒンドゥーが約五〇世帯ある。ここにプロテスタントのみとクリスチャン間、ヒンドゥー教徒との混成、ヒンドゥーのみの全部で四つのＳＨＧがある。どのグループも活発で、競い合っている。教会が信徒離れを防ぐためにつくった同様のグループもある。両方に所属している会員も多い。カースト村にはクリスチャンはいない。

ＷＯＬＤがキリスト教系の女性ＮＧＯであることと、センターからサータンバディ村が比較的近いこともあり、この村のダリットのＳＨＧは、すべて二〇〇〇年当初に出来ている。グループのアニメイターや会員は、ＷＯＬＤが行ってきたリーダーシップ養成や起業、健康、人権、環境、意思決定、個人開発、政治参加など、さまざまなトレーニングのほとんどを受けている。識字率も他の村のダリット女性に比べれば高い。教会で賛美歌を歌うことに慣れているので、ＷＯＬＤのつくった啓発用ソングやスキットを容易に受け入れることができた。そのためにＳＨＧが政府直轄に以降した後も、ＷＯＬＤのグループの性格を基本的に保っている。毎週のミーティングもそうである。グループの貯金を出し合って、ポンガル（タミルの新年祭）に村人全員に食事を提供し、子どもたちにノートを配るなどの共同行動もしている。

一方、このようなサータンバディ村のＳＨＧ活動からダリットのグループ起業の困難さを検証できる。ダリット・クリスチャンはＳＣの留保枠に入らず、ローンにもSC用の補助金がつかないために、経済的な困難はより大きい。大きなローンを無担保で借りられたとしても、利益を生めなければ返済ができない。イドゥリの店やスナックの茶店、栄養粉づくりなどを始めたが、すべて失敗した。食べ物の場合は、ダリットの小屋はごきぶりや蟻などがくるので、衛生上に問題がある。また、イドゥリは米粉や小麦の量、ソースのチャツネ用のココナッツや豆の分量などの計算ができないとうまく作れない。「上層カーストの店で買うほうが美味しいし清潔だ」というダリット自身のメンタリティもある。ダリットが作った食べ物はダリットしか買わないので、ダリットに買ってもらえなければ商売にならない。スナックに至っては腹を空かせた自分たち

の子どもが群がってしまう。

栄養粉は栗などのナッツ類、豆類、穀類、ハーブなど二〇種類ほどの滋養豊かな原料をそれぞれ粉にして混ぜ合わせ、袋詰めにして販売する。子どもや生理中、妊娠中などの女性の身体にとてもいい。ダリットのためにもなる健康食品として、他の村でも多くのグループが起業したが、大方が失敗した。州政府が貧困ライン以下の家庭の二才以下の幼児に無料配布し始めたからである。グループの女性たちも農業の日雇い労働で忙しい時期になると粉つくりができなくなった。他所で購入したほうが安いということになる。その他、線香やロウソクづくりも試みられたが、教会の祭礼時を除いて消費量は少ない。販売するために何人かで遠い町まで運ぶとバス代などの経費がかかる。

結局、牛や山羊などのミルク・アニマルを一、二頭、個人で買うのがビジネスとしては一番良い方法となった。しかし、昔のままのダリットの家では牛小屋のほうが大きいという、笑えない現実があった。そして、日雇い労働と家事労働（水汲み、薪取り、火起こしと食事つくり、洗濯、子どもの世話など）の上に家畜の世話が加わって、女性たちはさらに忙しくなったのである。

サータンバディの場合、クリスチャンが多いダリット居住区のＳＨＧは活発で、意識が高いにもかかわらず、あるいはそれが原因で、上層カーストのヒンドゥー・グループとの協力関係がつくれなかった。だからこそＷＯＬＤはパンチャヤート連合に力を注いだのだが、この村でグループ起業が成功しなかった理由でもある。同じことがサータンバディに属するアディヴァーシのＳＨＧにもあてはまる。サータンバディから四キロメーターほど離れた森林地帯に村がある。ＷＯＬＤセンターへはバスも道路もないところから一時間以上かけて、小さい子どもも連れながら徒歩でやってくる。グループができたのは二〇〇七年だが、アニメイターを含めてだれも学校教育を受けておらず、年齢もわからない。読み書きができないために、ＷＯＬＤのスタッフが記録を手伝っている。グループ名はガンガーだが、ヒンドゥー教徒ではなく、独自の女神信仰をしている。年配の会員が女神の賛美歌を歌っても、ＷＯＬＤではだれもそのタミル語を理解できない。全員が土地なしの日雇い労働者である。一週間に一〇ルピーづつ貯金し、グループ口座に九〇〇〇ルピー貯まったので、政府から五万ルピーのローンを得た。ミルク・アニマルを育てながらローンを返済中だが、将来の計画は、森林の木を伐採して、レンガ造りをすることだという。ＳＴだからローンには五〇％の補助金がつくが、他の共同体からの妨害に備えるためにも、メンバー全員が目的をよく理解して協力しなければならない。レンガのつくり方はもとより基本トレーニングが必要であるが、行政によるトレーニングには期待できない。

筆者も村を訪問したことがあるが、グループができるまでに長い時間がかかった。アニメイターのＳは、自分たち以外の世界のことも知りたい、

社会状況を理解したいと熱心だった。この村でも男たちの飲酒、けんか、妻への暴力は日常的だったが、ＳＨＧができてから、当初は非協力的だった夫たちが変わりつつあるという。問題は、自然災害や火事などの緊急事態の時でもＳＨＧ連合の協力が得られないことだという。サータンバディ・パンチャヤートには、ダリットが四つ、アディヴァーシが二つ、上層カーストが二つ、全部で八つのＳＨＧがある。下層グループがマジョリティにもかかわらず、上層カーストが連合を支配している。ＷＯＬＤは助言するが、決定には口出しできない。つまり下層グループの女性たちが地主である上層カーストと対等の意識によって行動できるようにならないかぎり、ＳＨＧのパンチャヤート連合はうまく機能しないのである。

中央政府の法令でメルマライヤヌル地区にはダリット用の一〇の特別選挙区がある。ダリット議員が人口比とは関係なく多数派を与えられる。女性についてはは中央から村まですべての議会の女性割当を三三％にするという法案はまだ可決されていない。しかし、村のパンチャヤート議会には女性議員が多い。これは規定で立候補を三期以上継続できない有力者がダミーとして妻や親族の女性を議員にするからである。留保枠のダリットの場合も同様である。しかし、ＳＨＧでエンパワーされたダリット女性たちが村議会で発言しはじめ、また自ら立候補する女性も出始めた。たとえば、ナルマンガラム村はダリット留保区の一つであるが、二〇〇六年の選挙で女性議員が五人、その内の四人がダリット、他にダリット男性議員が一人、四人が上層カーストの議員となった。任期は五年間で、再選可能である。ここはカースト村に約六〇〇世帯、ダリット居住区に約一五〇世帯があり、すべてヒンドゥー教徒である。かつてはカーストとダリット間の衝突事件が起きたが、現在はダリットの力が増して問題は起きていない。ダリット居住区は街道から奥まった辺鄙な場所にあるが、女性や子どもたちの表情は希望に満ちていて明るい。その大きな要因となっているのがＳＨＧの活動である。ＷＯＬＤがつくったＳＨＧが一五、その他が三つある。二〇〇二年来のＷＯＬＤのスタッフであるＭ（二七才、二〇一一年時）はこの村の住人で、二〇〇〇年に村で最初のＳＨＧができたときにアニメイターとなった。ナルマンガラム・パンチャヤート連合の書記でもあり、また村議会のダリット女性議員の一人でもある。

Ｍはタミル文学の学士号を持っている。恋愛結婚の夫も大卒で二年間の教師コースも終えたが仕事がない。Ｍは村役人だった父親の年金と公務員である母親に助けられながら、ＷＯＬＤの僅かな給料で夫と幼い子どもたちを養っている。しかし、ＷＯＬＤのスタッフとして村々をまわり、また様々なトレーニングに関わってきた経験と知識、それに高学歴であることによって、村議会では最も有能な人材である。政府のプロジェクトを担当し報告書の作成を担っている。インドの村会や町会議員は無報酬で、高カーストの有力者の名誉職でもあるが、さまざまな政府プロジェ

クトによる公的資金が増え、その使い方を決定する権限が増したから、賄賂や手数料などの汚職が常態化している。ＷＯＬＤはＳＨＧの会員トレーニングに政治的意識の向上を取り入れていたから、多くの村で古い村議会のありようを揺るがした。ナルマンガラムではＭのリーダーシップが勝ったが、全体的にはＮＧＯの影響力をそごうとする政治的なカースト勢力の巻き返しのほうが大きいといえる。

３－４　ＳＨＧの変貌とＮＧＯの課題

二〇一〇年の筆者の調査では、ほとんどのグループがすでに週毎のミーティングをやめて月一回にしており、ひどい場合は定例会も開かずアニメイターが集金していた。預金額も月五〇ないし一〇〇ルピーとなっていた。極貧の女性でも毎週一〇ルピーなら払えるが、一度に一〇〇ルピーとなると困難になる上に、債務の返済もあるから、工面できないと例会に出席できない。アニメイターによる集金は、する方もされる側も大変である。なによりも問題なのはミーティング以外では決議してはならないルールが崩れ、アニメイターなど数人の有力会員の決済で決まることである。ローンの申請時に払った賄賂などグループ帳簿に記載できないお金が発生したり、アニメイターの使い込みや逃亡、自殺などの問題も起きている。ＳＨＧのローンは会員間で希望者に分配されるが、返済はグループの連帯責任である。問題が生じれば不信と不和で、グループの継続が困難になる。

二〇〇八年にはまだ地区内の銀行や信用組合の前には、グループの貯金を預けにきた女性たちが大勢座っているのが連日みられた。どこも建物が日本の特定郵便局ぐらいなので中に入りきれず、外で順番を待ちながら交流しているのである。制服のサリー姿も減っており、カーストも宗教も混在して女性たちが座っている光景は、この地区の劇的な変化の象徴であった。金融機関も取引の多くをこれらのＳＨＧに依存するようになっていた。

しかし、銀行にとっては、貯金だけではなくローンを増やし、滞りなく返済するグループが良いグループである。役所も地区の発展の成果をＳＨＧのローン額ではかるから、政府によるトレーニングは取引に関係することに集中する。ところが補助金つきの事業を偽って申請し、そのお金を本来使用してはならないこと、例えばダウリー（結婚の持参金品）に使うなどして、返済に窮する会員が増えてきた。そのために闇金融のような別のマイクロファイナンス機関（ＭＦＩ）からに新たなローンを借りて返済することになる。このような事態にならないようにＷＯＬＤもグループのモニタリングを行ってきたが、ローン申請の書類から担当ＮＧＯの署名欄が消えた。行政によってＳＨＧパンチャヤート連合が

再編され、その会長が署名するようになったので、グループもNGOとの接触を避けるようになる。かつては「女のジープが来た」と村人からも歓迎されたWOLDだが、今では村に入ることも困難になっている。

問題に直面している事例はたくさんある。ムスリム人口が多数派のエダパット村がSHG活動によっていかに変化したかについて、パンチャヤート連合の役員選挙から紹介したことがあるので、(30)その後についてみてみよう。エダパットはWOLDセンターから約一五キロ離れており、交通の便も非常に悪い。しかし、ムスリムは商人が多いので、女性は非識字者が多いにもかかわらず、SHGの起業も盛んで、ミルク・アニマルの飼育の他にも、野菜や花造り、栄養粉つくり、ディーゼル売り、薬の店などを開いている。以前は家内に隔離同様だったムスリム女性たちの大変な変化である。しかし、WOLDのチェックがなくなってから、週の例会は月毎になった。また安易なローンを求めて複数のMFIに手を出している。全員から六〇〇ルピーを集めれば、最初に一人一〇〇〇ルピーを渡すと言われて騙されたこともある。

いまや多くの金貸し業者が村々に出入りしてSHGや会員の結びつきを利用している。SHG以前と異なるのは、かつては個々人に高利で貸したが、現在は五人ほどのグループをつくらせて低利だが連帯責任で貸す。最初に利子払いをすれば簡単に現金を受け取れるが、週毎に集金人が家に来るので、払えなければだれか他のメンバーが立替えなければならない。これも仲間の不和の原因になる。また、インド銀行に口座を持っているグループの場合は、政府の補助金が入金されているのに、「債務残高が五七六一ルピーある」と何度も督促され、補助金を渡してもらえない。この残高は銀行が間違えて別のグループの口座に入れたのだという。銀行は補助金を流用したり、最後は行員への賄賂で払われることもある。WOLDには自分たちで解決できなくなったSHGからの相談が絶えることがない。なぜもっと早くと、スタッフは呆れるが、グループにもWOLDへの後ろめたさがある。

一方、ペリアノランバイ村などでは違法酒の販売に抗議したさまざまな活動が他の村々にも広がって、大きな成果を生んでいた。ココナッツなどから違法に作った焼酎だが、混ぜものもあり命の危険だけではなく、酔った男たちの喧嘩、妻や子どもへの暴力も大問題だった。とくにダリットの男たちは夜に商人が村に持ち込んでくる違法酒をなけなしの金で飲むために、妻との喧嘩が絶えなかった。妻の日雇い賃金を受け取るのは夫だからである。酔った勢いで殴られたり、性交を強要されてきた妻たちは、SHGに参加して権利意識に目覚めた後は黙ってはいなかった。まず女性たちはパンチャヤットのリーダーにこのような違法酒の販売を禁止するように請願し続けたが、当のリーダー自身が販売に関わっていた。そこで、ペリアノランバイのSHGパンチャヤート連合は、カーストも宗教もこえて全員で警察所へ抗議のデモ行進をした。地区の開発担

当役人と政治家が来て調査と対応を約束した。そして、ついにペリアノランバイでは、二〇〇八年に酒の販売が禁止されたのである。勇敢な行動として新聞にも報道され、村人から感謝された。他の村のＳＨＧにも大きなインスピレーションとなった。

ところが、その後、州政府が酒販売を認可したために、二〇一〇年には街道沿いの小さな村や町の至るところに「公認ワインショップ」が出現した。夕方に周辺の村々から男たちが自転車や徒歩で「ワインショップ」に酒を飲みに出るから、毎日が男たちの祭りのような賑わいである。かつてはダリットとアディヴァーシ、クリスチャンしか食べなかった「聖なる牛」の肉をヒンドゥーの上層カーストの男たちも食べ始めている。村では厳しい共食や身体の接触のタブーも酒店では破られている。しかし、女たちは仕事から帰ってきても休む間がない。暗くなる前に家畜の世話や夕食の支度をしなければならないからである。ダリットだけではない。その他の後進諸階層の女性たちもほとんどが、グループのローンのおかげで楽になったというが、夫が酒を飲み、暴力をふるう場合は別である。

ＷＯＬＤはトレーニングによってダリットや貧困女性たちの自立力を養おうとした。しかし、ＳＨＧは基本的に既婚女性のグループであるから、夫たちが変わらなければ自立は現実には困難である。そこで、女性たちの希望はもっぱら子どもの将来と教育に注がれる。筆者が個人面談においてもっとも気になったのは、この点である。ここでは統計は省くが、ほとんどが非識字か小学校低学年の学歴で、自分の年齢を知らない女性たちも、男女を問わず子どもを学校に通わせている。子どもが将来は「政府の仕事」（国営企業や公務員）に就くことを夢にしている。「政府の仕事」とは、あまり働かなくても良い給料が安定的に得られ、賄賂や手数料も入って楽に暮らせる仕事を意味している。無学な自分たちがそれによって苦しめられているからこそ、成功者の役得だと考えているのである。また、インドは軍事国家であり、この地区にも夫や息子が軍人である女性がかなりいる。

一方、夫については、「良い夫」でなければ「飲んで暴力をふるう」のどちらかである。低カーストの男性は酒や病によって短命なので、「未亡人」も多い。出産などで命を落とす女性が多いにもかかわらず男女の人口比が変わらないのは、このような理由もある。村のダリット女性にとって、夫は地主や警官などカーストの男による性暴力から自分を守ってくれる存在ではない。面談によって語られる女性たちの個々の問題はあまりにも多い。一方、例外がみられないほどに元気で、リーダーシップもあるのが独身女性である。若い未婚女性のことではなく、身体障害などの理由で結婚できない女性たちである。結婚が宗教的義務であるヒンドゥー社会で、女が独身で生きるためには自立的にならざるをえない。「意固地な女」だったのがＳＨＧというつながりができて力を発揮しているのは、この地区に限らない。[31]既婚女性が夫や家族の協力を自立の鍵とせざ

るをえない一方で、独身女性はＳＨＧでハンディをプラスに変えている。

4　貧困女性の経済的自立―成功と失敗の分岐点

メルマライヤヌル地区についてみてきたように、女性ＮＧＯの熱意の下に、ダリットを含めた貧困女性たちのＳＨＧが一〇〇〇までになった。高利の借金に縛られてきた女性たちがサバイバルを確保できたことで自信を回復し、グループが連帯して福祉活動をし、子どもたちのインターカースト婚を実現させる行動なども行った。コミューナル衝突で危険な地区が貧困女性たちの行動で変わったのである。公共バスには無料パスで学校や塾に通う裸足の子どもたちの姿も見られる。なにより驚くのは、満員バスのなかでカーストの違いがわからないことである。村による違いはあるが、他州のように極端な男女の人口差もない。

では、政府の補助政策にも助けられて、本当に貧困女性たちは経済的に自立し行為主体性をもつことに成功したのだろうか。お金は女性たち自身が必要とし、自分たちが選択した商品の購入あるいは商品づくりのために使われているのだろうか。夫や役人をふくめた男性がプロジェクトの内容を決定し、女性が結果の責任を負わされているのではないだろうか。ローン返済のための重荷を負い、多忙になったのは女性たちだけではないのだろうか。また、極貧層の女性はＳＨＧに加入できない、あるいは加入しても債務不能で失敗しているのではないのだろうか、などの疑問がある。

アヴァルーペットのヒンドゥー寺院境内での伝統的な水曜市の入場税集めを村のダリット女性のＳＨＧが請け負ったこと[32]、幾つかの村でダリットのグループが政府の配給所の責任を請け負ったことなど、一時的に大成功した画期的事業が続かなかった。経済的利害がからんだ時の既成権力の力を示している。従来の家父長的なカースト制の慣行を破ったダリット女性たちの活動は、腐敗がないことで利益を得た関係者や村人からは感謝されたが、ほとんどが巧妙に内部分裂させられた。

インド政府がＳＨＧを直接管轄へと変更したのは、ＳＨＧつくりの困難な時期が終わって、ＳＨＧ希望が増え始めたことや、グループ数の増加によって政府からＮＧＯに支払われるＳＨＧ用トレーニング経費（交通費と食事代）が増え、サービス活動であるはずのＮＧＯがその金を流用していることが理由とされた。実際、そのようなＮＧＯもあったかもしれない。しかし、ＳＨＧの口座に行政から直接に経費が振り込まれる

ようになると、今度はグループがお金だけもらって政府のトレーニングを受けない。あるいは役人も個別グループの事情がわからない上に、取引の数字上の成果を挙げることだけを目的にしたから、この点で問題がなければ、賄賂で見過ごした。一方、ローン返済に苦しむグループや個人は二重、三重のローンを重ねたり、補助金で役人や代理人に騙されたのである。貧困女性のＳＨＧの成功のためには、ジェンダー平等による意思決定力が十分にエンパワーされなければならない。

このようなトレーニングを行ってきたＷＯＬＤのような女性ＮＧＯは生き残りが困難になっている一方、資金源のある大きなＮＧＯは自らがＭＦＩになるか、資金がないＮＧＯは複雑なローン申請手続きの手数料（例えば、申請ローン額の五％）をＳＨＧからとることでスタッフを養っている。しかし、逆からみれば、ＳＨＧに融資する金融機関もその他のＭＦＩも貧困女性たちの借金を最安の資金源としているのである。インドのＳＨＧプログラムは今や世界各国から視察団がくるモデルである。しかし、「誰のためのＳＨＧか」という批判[33]もあてはまるだろう。ＳＨＧによって貧困の撲滅が可能なのかどうか、疑問である。

5　おわりに

経済成長という大きな変化のなかにあるインドを、長年の差別と極端な貧困、そして性暴力に晒されているダリットの女性たちの変化に焦点を当てながら考察してきた。インド全土で深刻な性暴力は性のカースト制と切り離せない。ダリット女性たちが上層カーストや自分たちの男性から日常的に被っているレイプなどの性暴力は、これまではダリットのことだからと国内メディアは無視し、司法や行政も加担してきた。しかし、グローバル経済によって都市化がすすみ、女性の高学歴化でジェンダーが再編され、性暴力の犠牲者は外で働きはじめた上層カーストの女性たちにもおよび始めた。デリーが「レイプ都市」と呼ばれるほど、働く女性にとって危険な都市となったのは、男性たちの性のカースト意識が変わっていない証拠であろう。被差別民への暴力を軽視する社会は、被害が自分たちに及んできて始めて気づくことになる。根本から変わらなければならない。

一方で高額のダウリーや「名誉の殺人」がダリットにも及んできている。経済発展が性的な暴力と貧困を助長しているのである。インドは世界最大の民主主義国家と言われる。パンチャヤートから国会まで、一年中、選挙が行われており、貧困層ほど熱心に投票する。しかし、現代グロー

バル化世界の周縁がインドにある。本稿で筆者はインドの中でも最も良い意味での変化をおこした地域を検証した。他の州や地区の状況は、冒頭で述べたような女児殺しといい、ダリット女性への残虐行為といい、はるかに深刻である。グローバル経済と軍事主義が世界を覆っている現状が変わらないかぎり、インドばかりではなく世界の下層に置かれた女性たちの経済的自立は困難だろうと考える。

注

（1）このタイトルは筆者が日本学術振興会から科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）を得た研究課題名である。

（2）国連の人間開発報告書一九九五年「ジェンダーと人間開発」は「貧困は女性の顔をしている。世界の一三億人の貧困者の七〇％は女性である」と述べている。

（3）ダリットとは「砕かれた者」の意味で、カースト制の最下層の「不可触民」をさす。

（4）アディヴァーシとは「はじめの人」の意味で、インドの先住民族をさす。「トライブ」（部族）が行政用語であるが、本稿では総称としてアディヴァーシを使う。

（5）インドの学校教育制度は、初等八年、中等四年、高等三年の三段階になっている。
初等の義務教育は最初の五年間と後期の三年間に分けられる。中等も前期二年と後期二年に分けられる。高等三年卒が学士となる。中等教育では州レベルの試験があるために、とくに農村部では一〇年卒、プラス二年（一二年）卒が高学歴者となる。中等教育の学校には行っても、最終試験に受からなかったドロップアウトが多い。一方、英語媒体の私立学校は幼稚園からあり、知識階層や富裕層の子どもは英語媒体で教育設備も整った私立学校で学ぶ。

（6）インドにおける識字率については、国連開発プログラムのリポート、および"Gender Equality and Women's Empowerment in India" by National Family Health Service（NFHS-3）India 2005-06, International Institute for Population Sciences, Mumbai によれば、一五から四九才の貧困層の女性の識字率は一九％で、男性は四七％である。同年齢層の女性全体を都市と農村で比較すると、都市が七五％、農村が四六％である。

（7）アルンダティ・ロイ『誇りと抵抗―権力政治を葬る道のり』（加藤洋子訳）、集英社新書、二〇〇四年、八－九頁

（8）ウェブサイト、Primary Census Abstract, Census of India 2001, http://www.censusindia.gov.in

（9）ロイ、同上、１３５頁、R.Rangachari et.al., "Large Dams: India's Experiences: A WCD Case Study Prepared as an Input to the World Commission on Dams", Final paper : Novemver 2000, p.116-117, Online at http://www.dams.org/studies/in/

（10）インド・ダリット女性連盟（ＮＦＤＷ）の第三回タミル・ナードゥ州リーダーシップ・トレーニング（二〇〇八年六月一二－一四日）の資料より。

（11）ヴァルナは「色」を意味し、日本では四姓として知られる。その下に第五のヴァルナとしてアウトカーストがある。ジャーティは「出自」を意味し、現実のカーストにあたる。ヴァルナはイデオロギー的意味合いが強く、自分たちのジャーティがどのヴァルナに属するかは、最上位のバラモンと最下位のアウトカーストを除けば、よく知らない人が多い。

（12）インド憲法に明記されたが、さらに罰則を定めた法令が出された。The Scheduled Caste and The Scheduled Tribes（Prevention of Atrocities）Act, 1989, The Scheduled Caste and The Scheduled Tribes（Prevention of Atrocities）Rules, 1995, The National Commission for Scheduled Tribes（Specification of Other Functions）Rules, 2005

（13）優遇措置としての留保（reservation）とは、指定カーストや指定部族に対して、公的雇用、教育、立法議会議席数を割り当てること。その他の後進諸階層への留保枠では議会議席数は含まれない。

(14) 二〇〇一年の国勢調査の宗教別人口では、ヒンドゥー八一・四%に対して、ムスリム一二・四%、クリスチャン二・三%、シク一・九%、仏教徒〇・八%、ジャイナ教徒〇・四%である。ヒンドゥー以外はそのカースト構成は統計上不明であるが、ジャイナ教徒を除けば、ダリットが圧倒的多数を占める。ヒンドゥーのSC（ダリット）は一六・五%、STは八・二%である。そこで、インドのダリット総数は、少なく見積もっても三・五億人を超えると推定される。

(15) 留保枠に入ることを求めるカースト集団の多さに対して、そのような制度枠そのものに反対する高カースト中心のヒンドゥー・ナショナリズムについては、拙論「インドにおけるジェンダーとヒンドゥー・ナショナリズム―ダリット女性解放の視座から」（プール学院大学研究紀要、四八号、六一－七二頁、二〇〇八年）を参照されたい。

(16) アマルティア・センは、ヒンドゥー・ムスリム暴動による犠牲者の階級分布についても、階級的背景を考慮しない優遇施策が効果的ではありえないことを指摘している。セン『議論好きなインド人』（佐藤宏・粟屋利江訳、明石書店、二〇〇八）三五四－六頁

(17) 「不可触民解放の父」と言われるB. R. アンベードカルは、独立国家の憲法の起草委員会の長として、不可触制を廃止し、カースト差別を禁じ、男女平等を盛り込んだ憲法を成立させたのだが、カースト間の婚姻禁止条項ならびに相続法が削除されない限り、現実のカースト差別はなくならないと考えた。一九五一年に改定案を提案し、その削除を求めたが、保守的な民族主義者の反対で通らなかった。ネルー首相は法案を取り下げ、それに抗議したアンベードカルは法務大臣を辞任している。この間の経緯については、リドル、ジョアンナ／ジョーシ、ラーマ『インドのジェンダー・カースト・階級』重松伸司監訳、明石書店、一九九六、七四－五頁参照。

(18) サティについては多くの論考がある。例えば、マラ・センは一九八七年にラージャスターン州でおきた一八才のループ・カンワルのサティを現地調査し、ヒンドゥー社会の寡婦の悲惨な性と生を、女児殺しや持参金問題、その他の殺人との関連から描いている。（セン『インドの女性問題とジェンダー：サティ（寡婦殉死）・ダウリー問題・女児問題』鳥居千代香訳、明石書店、二〇〇四）一方、ウマ・ナーラーヤンは、サティを「ヒンドゥーの伝統」とすることをヒンドゥー原理主義者と西洋のフェミニストに共通するコロニアリストのスタンスであると批判し、特定の史的条件で特定のコミュニティで復活したものであることを重視しなければならないとする。（ウマ・ナーラーヤン『文化を転位させる』塩原良和監訳、法政大学出版局、二〇一〇）

(19) 北インドの農村での現地調査で、結婚式の変化を調べた八木裕子も、ダウリーの額が二〇〇〇年代に入って高騰し、贈り物も日本製品のブランド志向になってきていると報告している。八木「北インドの結婚式の変化―チャイからコーラへ」『南アジアの文化と社会を読み解く』（鈴木正崇編、慶應義塾大学東アジア研究書、二〇一一）九一頁

(20) 前出 "Gender Equality and Women's Empowerment in India" by National Family Health Service（NFHS-3）India 2005-06,pp7-18. 二〇一一年の統計については、ウェブサイトの http://www.censusindia.gov.in より。

(21) 常田夕美子は、嫁となった女性が家系の繁栄を守る役割を負い、日々の仕事で浄性を保つように自己統御することをオディシャー州の農村でフィールドワークしている。常田『ポストコロニアルを生きる―現代インド女性の行為主体性』世界思想社、二〇一一

(22) ヒンドゥー・ナショナリズムの出現と現状については、拙論「インドの宗教・社会統合・ジェンダー―ダリット女性の解放運動の視座から―」『現代宗教二〇〇九』（国際宗教研究所編、秋山書店）で論じている。

(23) アルンダティ・ロイ『わたしの愛したインド』片岡夏実訳、築地書館、二〇〇〇、一二九頁

(24) Seema Kazi "Between Democracy and Nation: Gender and Militarization in Kashmir"（Women Unlimited, New Delhi, 2009）のためのメアリー・カルドーの序文、

(25) "Status of Microfinance in India 2011-12, full book2", NABARD, web上よりダウンロード、五頁

(26) インド二八州の中で南の州は、ケーララ、タミル・ナードゥ、カルナータカ、アンドラ・プラーデッシュの四州。公用語はそれぞれマラヤーラム語、タミール語、カンナダ語、テルグー語である。

（27）NABARD の統計に基づくが、以下を参照。"Microfinance Self-help Groups in India: living up to their promise?" by Frances Sinha, Practical Action Publishing, UK, 2009, p5

（28）MICROCREDIT BASED SHGs AND WOMEN'S EMPOWERMENT: A Study Report on Micro Credit Intervention in Three Southern States of India, by Dr. Neelavalli, IWID, Chennai, pp64-67

（29）ＳＨＧが二〇人以下と決められているのは、インドの法律では二〇人をこえる団体は政府に登録しないといけないからである。登録番号をえると、外国からの資金は得やすくなるが、団体活動の条件が厳しくなり、政府の監視が入る。ＳＨＧはグループ名が一覧に載るだけで、村のグループにすぎないので、ローン返済の怠りがなければ、活動は自由である。

（30）拙論「インドの宗教・社会統合・ジェンダー――ダリット女性の解放運動の視座から――」、前出、二二四頁

（31）Neelavalli, IWID, ibid. p70

（32）拙論、二〇〇九、前出、二二二、三頁

（33）IWID "Micro-credit Self Help Groups – OF WHOM? FOR WHOM?" ,Chennai,
（tr.　by G. Anitha, Women's Education and Liberation）